

山上憶良 貧窮問答の歌

口語訳 万葉集 卷第五 八九二

問

風まじりに 雨降る晩は
雨まじりに 雪降る晩は
なすすべもなく 寒い
堅塩をつついて舐め 酒粕の汁をすする
しかし咳が出て 鼻水が垂れてくる
髭を撫でまわして
ここでは俺は 誰より偉いのだと 威張ってみる
でもそんなことをしてみても たまらなく寒い
麻かわの布団を ひっかぶり
綿の入った袖無しを ありったけ 重ね着する
しかしそれでも今夜は寒い

こんなにも寒い晩に
貧しい人たちは どうしているのだろうか
父や母は きつと凍えているだろう
女房や子どもたちは 力のない声で泣いているだろう
こんな時 おまえたちは
どんなにして 過ごしているのか

答

天地は広い　と言われるが
俺たちのまわりは　狭くて窮屈なだけだ
日月は明るく照らす　と言われているが
俺たちを　照らしてくれはしない
こんなことは　誰でものことなのか　俺たちだけがこうなのか
人として生まれ　なんとかやつと生きてきた
人と同じように　働いている　なのに

綿も入っていない　袖無しを着て
もう布団とは言えない海松のようになったボロの
雑巾のようなものを　肩までたぐり寄せ
掘立小屋の土間に　ワラを敷いて
父母は　枕の方で
女房と子どもは　足の方で
互いに肌を寄せ合い　寒さに悲しく呻く
竈（かまどールビ）には　煙も立たず
甑（こしきールビ）には　蜘蛛の巣が張っている
飯を炊くことさえ　もう忘れてしまった
ただただ呻くばかりだ

俺たちは　こんなにひどいのに
笞杖をもった里長の　賦役にかりたてる怒鳴り声が
小屋のなかまで　迫ってくる
どうにも　すべ無きものなのか　人の世間とは

憶良　ため息を吐きつつ
人の世間が　こんなにひどくて　嫌なものだとわかっていても
鳥ではなく　人間だから
空に飛んで　逃げ出すこともできないのだ